

## 論文

# 大学生主体の地域活動の展開（上） DoNabenet in あいちの取り組みから

永井 杏<sup>†</sup>・江口 愛可吏<sup>††</sup>・横井 里帆<sup>‡</sup>・大崎 あゆみ<sup>‡‡</sup>・松宮 朝<sup>‡‡‡</sup>

## 要旨

大学生主体の地域活動の推進をめぐるには、大学での教育プログラム、自治体や地域住民の活動との連携が課題となっている。大学側では、教育、研究とともに、第三の使命として地域貢献が重視される流れがあり、大学生の地域活動を通じた学びをいかに実現するかに目が向けられている。愛知県立大学の所在地である愛知県長久手市では、2009年策定の「第5次長久手市総合計画」に「大学をまちづくりに生かす」ことが明記され、2018年3月に「長久手市大学連携推進ビジョン4U」が策定されている。大学生主体の地域活動を、大学生の主体性を損なうことなく、どのような形で地域貢献に結びつけ、大学教育の改善に繋げていくことができるのか。こうした課題に対して、大学生主体の地域活動である DoNabenet in あいちの取り組みから、「大学をまちづくりに生かす」、そして、学生にとっての学びの機会となる取り組みの現状と課題について検討したい。

## キーワード

大学生、大学連携、地域貢献、ボランティア、長久手市

<sup>†</sup> DoNabenet in あいち元代表、愛知県立大学教育福祉学部卒業生

<sup>††</sup> 愛知県立大学教育福祉学部卒業生

<sup>‡</sup> DoNabenet in あいち代表、愛知県立大学教育福祉学部在学学生

<sup>‡‡</sup> 愛知県立大学教育福祉学部在学学生

<sup>‡‡‡</sup> 愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科准教授

## 1. 大学生主体の地域活動と大学の地域連携

大学生主体の地域活動の推進をめぐるには、大学での教育プログラム、自治体や地域住民の活動との連携が課題となっている。大学側では、教育、研究とともに、第三の使命として地域貢献が重視される流れがあり（松宮，2011）、大学生の地域活動を通じた学びをいかに実現するかに目が向けられている。この点に関して、愛知県立大学の所在地である愛知県長久手市では、2009年策定の「第5次長久手市総合計画」に「大学をまちづくりに生かす」ことが明記され、①大学との関わりによって生まれる新たな感性や視点をまちづくりに生かす、②大学にまちを開くことで相互の発展・充実に向けて連携を深める、③大学連携をきっかけに、地域の交流・顔の見える関係を増進するという3点をねらいとして、2018年3月に「長久手市大学連携推進ビジョン4U」が策定されている（小島・石井・川原・笹山・松宮，2018）<sup>1</sup>。

このような積極的な推進が見られるものの、大学生のボランティア活動をめぐっては、継続的なボランティア活動やボランティアに対する意識が定着したとは言えず（荒井・

野嶋，2017:98）、また学生のニーズや、地域のニーズを無視した制度化は、「強制されるボランティア」につながる問題（津止・斎藤・桜井，2009:62）がつきまとうことは事実であり、学生、地域のニーズを基盤にしつつ、その展開可能性を考える必要がある（松宮・石井・川原・小島・中根・笹山，2018）。

大学生主体の地域活動を、大学生の主体性を損なうことなく、どのような形で地域貢献に結びつけ、大学教育の改善に繋げていくことができるのか。本稿では、こうした課題に対して、大学生主体の地域活動である DoNabenet in あいちの取り組みから、「大学をまちづくりに生かす」、そして、学生にとっての学びの機会となる取り組みの現状と課題について検討したい。

## 2. DoNabenet in あいちの活動<sup>2</sup>

### 2-1. 活動の概要

DoNabenet in あいちの主な活動内容は、長久手市での食事会の企画運営である。団体名 DoNabenet in あいちの由来は、「Do Nabe（鍋を囲んで）net（つながりをつくる）」であり、

1 <http://www.city.nagakute.lg.jp/tatsuse/daigakurenkei/vision4u.html>、2018年12月31日閲覧。

2 2～4節は、永井、江口による2017年度卒業論文の内容をもとに、大幅に加筆・修正を加えたものである。

活動の大きな目的は、鍋などの食事を通して、地域の繋がり、「顔の見える関係」をつくること、それを地域の防災・減災活動などに繋げることである。2018年12月現在、愛知県立大学、愛知淑徳大学、愛知学院大学の学生49名で構成されており、2種類の食事会を行っている。

- ①「どなべ会」：小さな子どもから高齢者まで幅広い年代が対象で多世代交流（3か月に1回、土曜日の昼）
  - ②「土鍋のつどい」：対象者を大人に限定し、ゆっくりと落ち着いて話ができる空間（2～3か月に1回、土曜日の昼）
- 食事会の他にもお酒のイベントの企画、長久手市のイベントなどへの参加、他団体との交流も行っている。食事会の流れは以下の通りである。まず事前に学生メンバーが食事やアイスブレイクなど担当ごとに準備を行う。当日は9時から会場となる共生ステーションに集合し、会場の設営、調理を始める。この時間に地域住民や子どもが調理を手伝う風景を見ることもある。11時から受付にて大人500円、小学生以下無料で参加費を頂き、11時20分になるとアイスブレイクとして学生メンバーが用意したゲームを行い、参加者の緊張をほぐす。11時45分ごろに食事を食べ始め、その間に活動の想いや地域に関するテーマを持った話を全体に対して行っている。写真撮影や、毎回用意するアンケート記入へのお願い、次回の連絡を行ったのち、後片付けへと進む。

## 2-2. 活動の経緯

DoNabenet in あいちの活動の発足経緯について見ていこう。詳細を知るためにDoNabenet in あいちを創設した、初代代表であるO氏にインタビュー調査を行った（2017年8月15日）。

表1：発足までの経緯

2012.9.5～9.10	岩手県立大学 GINGA-NET に参加 岩手県陸前高田・住田町で被災地ボランティア DoNabenet の存在を知る
2012.12.22	DoNabenet 第0回（リニ祭メンバーとして）@愛知県立大学和室 学生、協力者とりニ祭に向け予行練習
2012.2.17	DoNabenet 第1回（リニ祭メンバーとして）@モリコロパーク 第一回リニモ沿線合同大学祭 LOCAL ブースの1つ 50名（愛知県学生×岩手県立大学×NEXPO） 協力：野菜：エコ農園さん、学校給食さん 鍋のもと：焼肉・もつ鍋屋 山樹さん
2013.5.16	親睦会 → 「DoNabenet in あいち」として活動スタート

3 法人設立趣旨書 <http://www.iwateginga.net/about/>、2018年12月31日閲覧。

4 岩手における「DoNabeNet」の活動については下記の通りである（<http://soup1993.net/321/>）。「岩手県立大学ボランティアセンターの学生が行う活動。大学のある岩手県滝沢村（人口5万3千人）でボランティアの依頼を受けるだけでなく、学生ボランティアセンターから発信する必要もあると考え、始まったのが「DoNabeNet」である。2009年から本格的にスタート。月1回ペースで滝沢村の自治会単位で公民館等を借用し、地域住民と学生とで鍋をする。会場の交渉、地域への広報、食材の調達、調理の段取り…といったプロセスは地域住民と行う。ここが大きなメリットとなっている。鍋を囲むことにより学生は地域住民と顔見知りになり、地域のボランティアニーズを知ることが出来る。実際に雪害に悩む地域での「スノーバスターズ」や、災害時の見守りマップといった活動にも繋がった。鍋は地域交流のツールであり、鍋を囲む「場」で生まれたつながりは、住みよい、安全で安心な地域づくりにつながるはず。大人数の食事を準備するプロセスは災害時の炊き出しトレーニングにもなる。

長久手市でDoNabenetの活動を行うきっかけとなったのは、2011年の東日本大震災であるという。東日本大震災では、東北地方太平洋沖地震によって東北地方をはじめ、大きな被害が起きた。GINGA - NET<sup>3)</sup> というプログラムで全国各地から岩手県でボランティア活動を行う機会があり、愛知県からも愛知県立大学をはじめ、複数の大学が参加した。様々なボランティアのプログラムを行う中で、岩手県立大学のボランティアセンターの学生が行う、「DoNabeNet」<sup>4)</sup> という活動を知ることとなった。

GINGA - NETにおける東北ボランティア最終日、グループになって今後地元に戻ったらやりたいこと、というテーマでグループワークを行った。そこで、O氏を含む愛知県から来た学生のチームは、地元愛知県でもいざうれ大地震が起これと言われていることを見据え、「愛知県でもDoNabenetの活動をしたい」という結論になった。

ちょうどそのころ、長久手市でリニモ沿線合同大学祭実行委員会という学生団体が立ち上がった。この団体は、DoNabenetと同じように学生が東北ボランティアに行った際、震災による地域コミュニティの崩壊を見聞きし、「助け合えるまち」を作りたいという想いで発足したものである。主な活動は年に一度リニモ沿線合同大学祭（以下、リニ祭）を開催することである。リニ祭は、長久手近辺の学生サークルや地域の団体、飲食店などが出店やパフォーマンスを行うイベントである。

この活動に共感したO氏は、DoNabenetの食事会の初回を、2012年の第1回リニ祭の1つのブースとして開催した。この時は長久手市にあるもつ鍋屋さんから鍋のつゆを、地元の農家から野菜を寄付してもらい、リニ祭来場者や地域のイベントで出会いお誘いした方に振る舞った。また、東

表2：これまでの食事会ごとの工夫、効果と課題

日付	内容	メニュー	①議論内容	実践	参加学生	参加者数	②当日の様子	③参加者、学生の声・評価	④成果	⑤課題
2015.9.5	第7回 どなべ会	手巻き寿司	参加表明の方法難しい	共生ステーションに目安箱設置 共ステ利用者が対象	21	26	ママ友さんが集まる	片付けが中途半端	学生メンバーが増え、賑やかに	公共施設を使わせてもらっている 感謝
2015.11.15	長久手市 防災訓練	けんちん汁	活動を知ってもらうためには？	チラシ、模造紙での紹介 アンケート&宣伝			けんちん汁を振舞いながら 西小校区の人と交流	学生が関わることで盛り上がる	西小校区住民との関わり、市職員との繋がりが	職員との連絡やり取り災害時の大鍋の使い方が不明
2015.12.5	第8回 どなべ会	ミルフィーユ鍋	前回の反省を生かす。(片付け)	意識の徹底	11	13	匂いにつられて参加した人がいた。	PRを進める、子どもが苦手		参加者の固定化、アンケートの活用
2015.12.12	第1回 土鍋のつどい	生姜みぞれ鍋	2チームに分かれ、方向性決定	各チームで密に話し合う ⇒全員に共有 メンバーの人数が多くなったが効率◎	11	4	参加人数は少なかったが、大人だけでゆっくり食べながら話すことが出来た	新しい雰囲気新鮮だった	どなべ会とは違った雰囲気 ニーズがある	参加人数が少なく、PRしていく必要性
2016.2.13	第2回 土鍋のつどい	しゃぶしゃぶ鍋	PRのためにも自分達が地域に出て行く 引継ぎ	西小校区の自治会長さんにアプローチ ⇒回覧板はNG しかし打越久保山防 災会を紹介され交流に繋がった 会計、名刺作成の引継ぎ	12	31	市議会議員、民生委員、市職員、市外の人など、様々な人が参加し、前回より参加者が増加した	大人だけで落ち着けた、大学生と話す機会が嬉しい 閉じこもっている人はあまりいない？	ういいういの会との繋がりが ⇒別の交流会に民生委員、自治会、市職員が参加	前回からの日程が近く、学生メンバーの負担大会を回すことに精一杯になりがち
2016.3.5	第9回 どなべ会	ちらし寿司	アンケートの活用 何を聞くか メンバーがどんな想いを 持って臨むか	“私たち学生とやりたいことは？”の項目 ⇒次に繋げる メンバー各自がテーマを持って会に参加	12	31	ママ友での同士での参加や、小学生のみの参加も見られた。 持ち寄り品が多く、賑やかな会になった	アットホームで楽しい (日福学生)		
2016.3.11	オサケネット		オサケで繋がるためには？	協力：NPO 歩歩、なでらぽ 協賛：酔仙酒造（陸前高田市）			お酒もあり、普段の食事会とは違った雰囲気。 なでらぽとの繋がりがもてきた。 普段の会の参加者やOBOGも参加	“ほっこり”する会になった お酒には力がある？ 続けていきたい	歩歩やなでらぽとの繋がりが 活動のきっかけ（東日本大震災）を振り返るきっかけになった	外部への発信不足 身内の参加多い
2016.5.7	第3回 土鍋のつどい	サンドイッチ	PR方法 新入生の勧誘	ポスティング継続	11	17	地方ケーブルテレビの取材が入った	受付から開始までの時間が長い	ケーブルテレビで紹介された。	次回以降の日程が分からない ⇒年間スケジュール必要 調理が間に合わない ⇒手順準備
2016.6.4	第10回 どなべ会	世界の料理	会が始まるまでの時間	受付時間を 10時30分から 10時45分に変更	12	18	受付から開始までがスムーズだった。 世界各国の料理を知るきっかけになった	子どもが調理に参加できると良い（食育にもなる）		アレルギー問題
2016.9.3	第11回 どなべ会	夏野菜カレー	周知活動； ポスティング 衛生面	会報作成 ⇒チラシと共に配る アレルギーについて事前に参加者にメールで聞く。 検便問題 OK 社会福祉協議会で団体登録、保険加入	14	41		他テーブルとも話したい	イベントごとの保険に加入 (怪我や食中毒に対応できる)	
2016.10.29	第4回 土鍋のつどい	かぼちゃのほうとう鍋			11	9				時間の関係で、参加者からの持ち寄り品は既製品だと調理が楽になる 席から人がいなくなり、交流できないことも
2016.11.20	長久手市 防災訓練	おしるこ	費用問題	市からは× 自治会に相談 ⇒全額補助			西小小学校区の多くの人におしるこを配布し、喜んでもらった DoNabenetの普段の活動のPRができた	美味しい。 活動に興味がある。	自治会からの応援 2年連続で参加することで認知度UP	衛生面
2016.12.17	第12回 どなべ会	生姜みぞれ鍋	参加者からの持ち寄りについて 次回のメニュー	持ち寄りは時間的に既製品でお願いする 決めきれない 一ざっくりテーマだけ決める	15	13	装飾や食事の飾りつけでクリスマス感があった(季節感を感じることができた)	人数が少なかったが楽しめた	3期生（新メンバー）が 会に慣れてきた	メンバーが持ち寄った器具の管理 新メンバーへの情報の共有
2017.3.4	第13回 どなべ会	春の料理	新年度に向けて テーブルを超えた交流のために	年間スケジュール決め、新しいメンバーへの情報共有 席を自由にする	9	20	席自由→テーブルごとに差ができる（子どもが多い、人数が少ないなど）		地方創生大臣の共生ステーション訪問日だったため、どなべを紹介してもらえた 一認知度がある程度あったから？	備品の不具合 →リスト化 部内外の連携
2017.6.3	第14回 どなべ会	ピクニック風	団体内での課題解決	部局（役割）ごとにノート作成→引き継ぎ 議事録、新メンバー勧誘	13	16	テーブルごとではなく、様々な人が関われるよう工夫			
2017.6.24	第5回 土鍋のつどい	ちゃんこ鍋	子どものお手伝いについて	安全面、衛生面に気を付けながら、できることを一緒に行う	10	8	参加人数は少なかったものの、初参加の方もおり、話が弾んだ	月に2回行うのは大変	参加者に後日ありがとメールを送る (誘うだけでなく、感謝の想いを伝える)	メンバーによって負担の差が大きい。 役割分担が必要。
2017.9.2	第15回 どなべ会	日本の料理	メンバーの想いについて	やるべきこと、今後やりたいことをメンバーで話し合う時間を取った。 一想いの共有	11	11	スムーズにいき、各メンバーが楽しむことができた。 チラシを見て新たに参加してくれた男性がいた	初参加の男性；料理のレパートリーを増やした	土鍋を使い、タコ飯を炊いた。土鍋が鍋のためだけではない。 土鍋の可能性を感じた。	メンバーの負担軽減。
2017.11.18	第6回 土鍋のつどい	秋の味覚	周知活動の見直し 新たな取り組み 福祉講話	市の広報誌への掲載 ポスティング枚数を約500枚→2000枚に サロン訪問（高齢者、子育て、趣味）による広報 愛知県立大学社会福祉学科の学生による福祉講話（認知症への対応）を実施	17	16	サロンで活動を知った人や、市の広報誌を見た人の参加があった。 初参加の人が多かった	広報の重要性を実感	これまでにない広報活動を行うことで、新たな人が参加がしてくれた。 学生の講話は新鮮で良かった。学生も新たなメンバーが参加していた。	
2017.11.19	市内一斉防災 訓練	おしるこ	広報	チラシで紹介			普段活動している西小小学校区で参加し、約600名の近隣住民の参加があった。 振舞ったおしるこも好評だった		大勢の地域住民におしるこを振舞い、普段の活動の宣伝を行うことができた。	

北ボランティアで関わった GINGA - NET のメンバーも参加してくれた。しかし、リニ祭は年に一度のイベントであり、このままでは地域住民同士の繋がりを作ることに限界があると O 氏は感じた。そのため、DoNabenet の活動に共感したメンバーとともに独立し、DoNabenet in あいちという新たな学生団体を発足させたのである（表 1）。

2013 年 5 月に学生団体 DoNabenet in あいちは発足し、その後愛知県立大学、愛知淑徳大学、愛知学院大学、愛知外国語大学など、長久手市近辺の大学からメンバーが 10 名ほど集まった。しかし、そこから約 1 年間は食事会を開催するまでに至らず、月 1～2 回のミーティングを行っていた。ミーティングでは各メンバーの想いや今後の活動の方向性を話し合った。

その頃長久手市では、「地域共生ステーション」を市内 6 小学校区に作る取り組みをしていた。「地域共生ステーション」は、市民、市民団体、事業者、行政などが、それぞれの地域で気軽に集い、語らい、地域の様々な課題に対する取

組みを行うための拠点として、既存の空き店舗などを活用して、小学校区ごとに整備を検討していた施設である（松宮、2014）。2013 年度は、「あいち地域づくり連携大学」において、6 小学校区の先駆けとして西小学校にできる「地域共生ステーション」の使い方についての話し合いが複数回にわたって行われており、O 氏をはじめ、DoNabenet in あいちの学生メンバーが参加することになった。その話し合いでは、地域住民らと共に西小校区地域共生ステーションでしたいことについて検討した。その際 O 氏らは DoNabenet の食事会を開催したいと提言したところ、前向きに検討してくれるとの話に至った<sup>5)</sup>。第 1 回目の食事会は 2014 年 5 月 17 日に西小校区地域共生ステーションで開催した。それまでに共生ステーション付近の住宅にチラシを配ったり、福祉まつりや防災訓練に参加したりして、繋がりができた人に呼び掛けて実現したものである。

これまでの食事会を開催するにあたって話し合ったこと、食事会のメニューや参加者数、当日の様子、成果や課題を

表 3：関連する活動

2015.11.15	長久手市内一斉防災訓練 @長久手西小学校 炊き出し（けんちん汁）で参加
2016.2.18	「DoNabenet につぶく」との交流 @日本福祉大学美浜キャンパス
2016.3.11	第一回オサケネット @デイサービスるんるん
2016.3.13	長久手市 打越・久保山防災会との交流（味噌煮込みうどん）@共ステ
2016.5.8	さつまいも堀り シルバー人材センターの方と
2016.6.25	「とこなべ会」への参加 @常滑市 みんなの縁側
2016.6.29	長久手学生団体 交流会 @まちづくりセンター
2016.7.11	「静岡 2.0」との交流（生姜みぞれ鍋）@共生ステーション
2016.8	ボランティア 社協子どもサロン もりもり元気食堂&さくさく宿題教室 長久手北小学校 夏休み宿題教室 長久手西小学校 夏祭り
2016.1	さつまいも堀り シルバー人材センターの方と
2016.11.22	長久手市内一斉防災訓練 @長久手西小学校 炊き出し（おしるこ）で参加
2016.12.11	第 5 回リニモ沿線合同大学祭 休憩所（ほっとスペース）で参加
2017.5.14	さつまいも苗植え シルバー人材センターの方々と
2017.5.27	第 2 回オサケネット @NPO 楽歩事業所
2017.5.30	長久手学生交流会 @まちづくりセンター
2017.8	ボランティア 社協子どもサロン もりもり元気食堂&さくさく宿題教室 長久手北小学校 夏休み宿題教室 長久手西小学校 夏祭り
2017.9.1	「DoNabenet につぶく」との交流 @美浜町
2017.10.1	ボランティア 長久手市西小学校三代目運動会
2017.11.19	長久手市内一斉防災訓練 @長久手西小学校 炊き出し（おしるこ）で参加

5 この取り組みについては、愛知県・愛知県立大学・（公財）愛知県市町村振興協会編（2014）にまとめられている。

明らかにするために、ミーティング記録を基に表にまとめている(表2)。表からも分かるように、2014年5月に第1回目を開催した後は、約3か月に1度食事を開催している。メニューは鍋に限らず、手巻き寿司やたこ焼きなど、様々なものを用意してきた。より親しくなれるよう、できるだけテーブルの皆でつき合えるメニューになるような工夫を試みている。

また、食事会以外にも、ボランティアや他団体との交流を行っている。それについては表3を見てほしい。

表2,3から、これまでの活動の中で、内部、外部とのかかわりに関する大きな変化がそれぞれ2点ある。内部、すなわち活動内容の変化としては、対象者を限定した食事会「土鍋のつどい」を行うようになったことである。団体設立当初は子どもから高齢者まで様々な年代を対象にした食事会である「どなべ会」を開催していた。しかし、2015年秋ごろのミーティングで今後の方向性を話し合っていた際「孤独になりがちな独居高齢者」への対応に関する意見が出てきた。また、食事会後の参加者へのアンケートの中に、「ゆっくり話をしたいが、子どもがいると賑やかすぎて落ち着いて話ができない」という声があったことも、対象者を大人に限定した食事会を行う大きなきっかけになった。これまで行ってきた多世代交流になる食事会とは別に、対象を大人だけに絞った「土鍋のつどい」という会を開催することで、落ち着いた雰囲気できちんと食事ができている。最近では会の中で、災害時の対応や認知症への対応についての講話の時間を設けるなど、大人が集まるからこそ知ってほしい内容も考え、試している。第1回の土鍋のつどいは2015年12月12日に行い、その後も年に2~3回の頻度で行っている。

2点目は、お酒をツールにしたイベントである。地域活動には男性の参加が少ないと言われている。そんな男性でもお酒のイベントなら来やすいのでは、との学生メンバーの意見から、「オサケネット」というイベントも企画し、第1回目は2016年3月11日に行った。この日は東日本大震災が起きた日でもあり、当時の話をするなど、「学生、参加者ともに震災のことを忘れない」という意図が含まれている。また、このイベントでは日本酒をメインにしており、この日楽しんで日本酒は、岩手県の酒造<sup>6</sup>に提供して頂いた。

外部との関わりにおける変化の1点目は周知方法の多様化である。以前はいかに地域住民が食事会に来てくれるかを考えることが多く、チラシのポスティング等は行っていた。しかし話し合う中で、食事会に来てくれるのを待っているだけでなく「地域へ自分たちが出ていくことを大切にしよう」という思いが強くなっていった。具体的な活動としてまず長久手市市内一斉防災訓練がある。これは2015年秋に長久手市の担当課から依頼を受けたことをきっかけに、炊き出し担当として参加した。ここでは地域住民に活動の周知を行ったり、実際に話すことで交流を深めたりしながら、学生も災害があったときの対応を学んだ。毎年11月に行われる長久手市市内一斉防災訓練には、2015年から4年連続参加している。他にも、シルバー人材センターの芋ほりのお手伝い、地域の防災会の方との交流会(食事会)、社会福祉協議会のイベントのボランティア(加藤, 2018)など様々なイベントに参加している。また長久手市内の高齢者や子育て、趣味に関するサロンに訪問し宣伝することで、長久手市市内での認知度向上に繋げている。

2点目として DoNabenet in あいちの活動に似た活動をす

表4：参加動機

<p><b>Aさん</b> 自分が住む長久手市で活動していたのと、食事会が楽しそうで興味を持ったからです。他のボランティア団体は特定の年代を対象としているところが多いけれど、どなべ (DoNabenet in あいちの略称) は子どもから大人まで関わられるため、いろんなお話が出来、つながりについて考えることが出来ると思います、参加しようと思いました。また、ミーティングの雰囲気が好きだったので参加しました。</p>
<p><b>Bさん</b> はじめは、食べることとつくるのが楽しそうだったからで、決め手は新歓の際の先輩の雰囲気が良かったからです。内輪ノリじゃなく外部を受け入れる雰囲気に魅かれました。</p>
<p><b>Cさん</b> 大学に入学して何か新しいことを始めようと思って、「鍋を囲んでつながりづくり」というニュアンスの言葉に好奇心を抱きました。また、市役所の方とも関わる機会があると聞いて興味を示したからです。県大にある他のボランティアは、活動の開催場所が大学付近でなく名古屋で開催するなど、自分の家から遠いこともあり、続けていくのは厳しいと感じました。</p>
<p><b>Dさん</b> 地域交流の現場に行きたい、見てみたいと思い、地域とのつながりがほしいと思ったからです。1年生の時に行った「ボランティアフォーラム」の分科会が「地域交流」で、地域交流についての講演を聞き、興味を持っていた時にちょうど、先輩のFacebook からどなべの新歓についての案内が流れてきたので、参加したいと思いました。</p>
<p><b>Eさん</b> 新歓で先輩が話しているのを聞いて、最初は鍋食べたいと思ったからで、ちょうど何か他のボランティアを継続的にやりたいと思っていたからです。対象が子どもだけであるボランティアはやっていただけ、他の分野でもボランティアをやりたいと感じていて、高齢者施設のボランティアも考えていたけど、結局地域分野でやろうと思いました。</p>
<p><b>Fさん</b> 大学に入った時何かやりたいな、とっていて、特に地域福祉がやりたいとか思っていたわけではないけれど、ミーティングの先輩や話し合いの雰囲気が良かったため所属しようと思いました。ただ、ミーティングの内容が全て理解できないものであったわけではなく、昔長久手市の西小校区に住んでいて、活動エリアを身近に感じたため続けてみたいと感じました。</p>

6 <https://www.facebook.com/donabenet.nfu/>、2018年12月31日閲覧。

る団体とも交流を深めていることである。愛知県常滑市では、DoNabenetのように食で地域を繋げたいとの思いを持ち、2016年春から「常鍋会（とこなべかい：常滑と常に鍋をかけている）」を開催しており、DoNabenet in あいちのメンバーも招待してもらった。また、震災が起きる前からで

きることをしたい、という思いで2012年から多世代交流の場を作っている「静岡2.0」<sup>7</sup>という団体とも、同じような思いを持つ仲間として、交流会を行った。ここでは実際に鍋を囲み、DoNabenetの活動をより理解してもらえた。さらに2016年2月には日本福祉大学でもDoNabenetの活動を

表5：活動を継続する原動力

<b>Aさん</b> 食事を通して地域の人と会話をすることや、どなべのメンバーの知り合いを通してもらえるボランティア情報をもとに食事会以外のボランティア先に行ったとき、「〇〇さん！」と覚えていてもらえたりするのも含めて目に見えるつながりが楽しいからです。つながりの広がりを実感できることで自分の成長にもつながることや、食事会だけでなくミーティングの時から先輩との関わりも楽しいので続けていきます。
<b>Bさん</b> 自分とは違うメンバーがいて、楽しいけどまじめなところがあるからです。
<b>Cさん</b> 今は代表として、ミーティングの内容を考えなければならない立場で、現状把握をしながらまとめていく立場ではあるけれど、代表になる前もどなべでは自分の役割があると思えたから続けてこられました。先輩後輩関係なく意見を言い合せて、受け入れる空間が良いと思います。また、食事を囲んで長久手市の住民の方々と様々な話題でコミュニケーションとることが出来るのが楽しいです。
<b>Dさん</b> 他大学に行くこと自体楽しいし、他大学のメンバーと交流できることも良いと思うからです。「ボランティアフォーラム」で、周りのメンバーが外に向けて動いていく人たちばかりで、自分の大学にとどまることなく出ていくことの必要性を感じました。活動を継続していき、他の人に自分の活動を口で伝えていくことで、自分が関わっていることを（介助犬や地域福祉のことについて）知ってもらうことが出来るから継続していきける側面もあります。
<b>Eさん</b> 人と話せるようになったし、人と関わることが楽しいと思えるようになったからです。どなべのメンバーと居れるのが楽しいし、1回つながった人とずっとつながっていたいと感じるようになって、知り合いが増えていくのが楽しいからです。
<b>Fさん</b> 自分自身アルバイトや部活をやっている中で、どなべでは他大学のメンバーや幅広い世代の人と関わる機会があるので、アルバイトや部活とはまた違った感覚が味わえて楽しいと思えるからです。

表6：活動を通して得られたもの

<b>Aさん</b> 積極性です。いろんな人がいる中で、話す中での発見があり、相手がどのような活動をしている人なのか見えてくることもあるので、人に自分から話しかけよう、会話を続けよう、と思えるようになりました。
<b>Bさん</b> グループ活動で、自分の役割について考えて動けるようになりました。
<b>Cさん</b> 報告・連絡・相談をしっかりとるクセが身につきました。自分の役割があるからこそその役割をこなすことで、自分は何が得意で何が不得意かを見分けられるようになりました。長久手市で行われるボランティア情報が、最初は代表である私のもとに届くため、その都度、自分が代表であることを自覚します。また、自分が意見を言い、メンバーからレスポンスが返ってくるときに自分の居場所があると感じ、チームプレイでお食事会をつくっていく経験はどなべを通して得たものです。
<b>Dさん</b> 地域に関してや、団体の在り方について考える時間が増えました。どなべは学生主導だけど、他のボランティアはボラセン(ボランティアセンター)の職員さんが手助けしてくれます。どなべは団体として土台から作り上げていて、ボランティア保険のこととか、道具の管理など当たり前の疑問も考えることが出来るようになりました。
<b>Eさん</b> 人と話すことが好きになりました。大人とのかかわり方を学んで、LINEで会話をするだけの世界ではないし、いろんな人との挨拶の仕方を学びました。あとは、責任感です。みんなで何かをやっていくことについて考えられるようになったし、どうしたらみんなで作っていきけるか、みんなが楽しくやっていきけるか考えるようになりました。あと、行動力。最初は代表だから行かなければいけないという義務感で地域の行事に参加していたけれど、そのうち行くことが楽しくなってきた、絶対に行けば何か楽しいことがあると感じ、行動していきけるようになりました。
<b>Fさん</b> 他大学との交流で、自分とは違う考え方やかを知ったり、見つけたりすることが出来て楽しいとか嬉しいと感じます。4年間の活動期間で顔見知りが増えていくことです。昔長久手市に住んでいたけれど、今プライベートで共ステに行ったりするときに、職員の人やそこにいる大人の人が自分のことを覚えてくれたりして、スーパーとかでも職員の人に合せて挨拶をすることが出来たりして、顔見知りの存在が増えたことはどなべの活動を通して得たものだと思います。あとは自分で考えて行動することです。先生から何かやりなさいと言われてやる団体ではなく、自分たちで企画して運営する団体だから、やりたい企画があった時に出来る、出来ないに関わらず、自分がすればいいとか、他人とどう協力すればいいかを考える機会を得ることが出来ました。自分自身の弱いところを見つけてもっと事前に動くことが出来ればよかったな、とか見つけることが出来ています。

7 <http://profile.ameba.jp/shizuoka20/>、2018年12月31日閲覧。

始め、「DoNabenet につづく」が立ち上がった。そのスタートアップの会には DoNabenet in あいちのメンバーが招待され、長久手市での活動報告や今後の課題、方向性を発表すると同時に、同じような想いを持つ日本福祉大学の学生と交流した。他にも愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーション・センター（CCC）や、愛知学院大学のボランティアセンターとも交流を続けている。このような地域団体や学生団体と交流することで、DoNabenet の活動の成果や課題を振り返るきっかけになり、活動の改善に繋がっている。

### 3. 活動の成果

#### 3-1. 大学生ボランティア調査から

前節では活動発足からの動向について概観してきたが、大学生ボランティアのみずからの活動らについてどのように捉えているのだろうか。この点について明らかにするために、2017年度の参加学生6名にインタビュー調査を行った。

参加動機（表4）として、「食事会が楽しそうだったから」、「ミーティングの雰囲気が良かったから」という意見が多くあった。はじめから「地域交流」や「つながり」といった

ことに興味があった人もいるが、何かを始めたくて参加した人もみられる。興味のある活動内容かどうかも重要だが、楽しめる雰囲気があるかどうかも参加する際の重要な要素となるようだ。また、大学で公認されているボランティア団体の活動場所は市町村をまたぎ様々であるが、長く続けようとした場合、大学付近の長久手市で活動が行われていることも参加動機の1つとなり得ようだった。

活動を続けていける原動力（表5）として、ほとんどの学生が「メンバーと関わるのが楽しいから」と話していた。また、活動の目的である「つながりをつくること」に楽しさを感じている人もいた。団体の中で役割があることも含め、先輩、後輩関係なくメンバーと関わり活動できることや、子ども、高齢者関係なく地域住民と関わるのが、学生にとっては充実感をもたらし、新たな刺激を得ているのかもしれない。

活動によって得られたもの（表6）としては、「人（大人）と話すスキル」や、「自分の得意、不得意な部分を見つけることが出来た」などが挙げられた。原動力のところで述べたように、あらゆる人と関わることで生まれる楽しさや刺激が、学生にとっては経験値として学びになっているよう

表7：参加者のプロフィール  
 ①誰と参加しているか ②いつから（何年）参加しているか ③交通手段 ④最初に参加した方法

<p><b>Gさん 30代 女性</b>                      ①小学生の子ども（1人）と参加                      ②第13回お食事会（2017年3月4日）の会に初めて参加し、引き続き6月に2回目の参加                      ③交通手段：車（開催場所まで10分くらい）                      ④最初に参加した方法：知り合い（Bさん）に誘われて</p>
<p><b>Hさん 40代 女性</b>                      ①小学生の子ども（1人）と参加                      ②第3回お食事会（2014年11月29日）から参加                      ③交通手段：歩き（開催場所まで30秒ほど）                      ④最初に参加した方法：長久手市共生ステーションに掲示してあるチラシを見て</p>
<p><b>Iさん 30代 女性</b>                      ①未就学児（2人）と小学生（1人）計3人の子どもと参加                      ②第5回お食事会（2015年3月14日）から参加                      ③交通手段：子どもが小さかった頃は車（開催場所まで約5分）、今では自転車か歩き（約15分）                      ④最初に参加した方法：長久手市共生ステーションに掲示してあるチラシを見て</p>
<p><b>Jさん 60代 男性</b>                      ①1人で参加                      ②参加継続年数は約2年                      ③交通手段：車（開催場所まで約10分）                      ④最初に参加した方法：メンバーと知り合いだった</p>
<p><b>Kさん 40代 男性</b>                      ①元会社の同僚（Lさん）と参加                      ②第5回土鍋のつどいに初めて参加（2017年6月24日）                      ③交通手段：車（開催場所まで30分以上）                      ④最初に参加した方法：メンバー（卒業生）と知り合いだった（長久手市のNPO法人「楽歩」と繋がりがあったことから「オサケネット」に参加し、DoNabenet in あいちのメンバーと知り合った。）</p>
<p><b>Lさん 40代 男性</b>                      ①Kさんと参加                      ②第5回土鍋のつどいに初めて参加（2017年6月24日）                      ③交通手段：自転車（開催場所まで15分未満）                      ④最初に参加した方法：Kさんに当日誘われ急遽参加</p>

だ。また、代表という役割の経験の有無に関わらず、「自分の役割について考えて動くようになった」という意見が挙げられた。1人1人に明確な役割がある分、組織としての自分の立場を把握し、動き方を学んでいる人がいるのだろう。

### 3.2 参加者の声

次に、参加者に、数ある学生団体の中からもなぜDoNabenet in あいちに参加していただいているのか、大学生ボランティアが地域で活動することについてどう感じているかを明らかにするために、地域の参加者6名にインタビューを行った。

参加状況(表7)は様々で、30代40代の主婦の方は子どもと一緒に参加し、60代の男性は1人で参加し、知り合いと2人で参加する人もいた。長久手市外から参加しているKさん以外は、開催場所まで、遠くても車で10分以内であることが分かった。開催場所が近いことは、参加動機の1つになっているのかもしれない。最初に参加した方法として、共生ステーションのチラシを見たこと、ママ友やDoNabenet in あいちのメンバーに誘われたことが挙げられていた。周知活動の幅を広げていくと同時に、参加者や、メンバーが周知活動の媒体となることも認識しておく必要があるだろう。

参加した理由(表8)については、「料理」に関して食べることを、作ることがきっかけで来てくださっている方がいたり、普段接しない人と接することで「気晴らしになる」、「新たな発見がある」といった声があった。さらに、「学生に社会の実態を伝えていける」と話してくれた人もいた。料理を介してあたたかい空間を作り出しているだけでなく、そこに学生がいることで、伝えられるものがあると感じてくれる人もいた。また、初めて参加していただいた方

にも、「食事」と「コミュニケーション」により「家族と話しているような雰囲気になった」と感じていただくことが出来ているようだった。

ではなぜ、長久手市に多数ある大学生ボランティアの活動の中で、DoNabenet in あいちに足を運んでくださるのだろうか。インタビューをした6人の参加者のうち、3人は他の学生団体の活動にも参加した経験があり、他3人はDoNabenet in あいち以外参加したことがないとのことだった。参加方法は、共生ステーションに置いてあるチラシを見たことや、長久手市のイベントでメンバーと知り合ったこと、知り合いに誘われたから、といった経緯であった。1回来ただけで顔をみなくなってしまう参加者もいる中で、なぜ再び参加しようと思ったのかを尋ねたところ、「料理がおいしかったから」、「料理を振る舞うのが好きだから」、「自分自身の気晴らしになるから」、「学生や普段接しない人と話すのが新鮮で、発見があるから」、「子どもをみてもらえるから」、「人とつながることが大事だと感じているから」、「学生に社会の実態を伝えられるから」といった意見が出た。やはり、DoNabenet in あいちの特徴である「食事」が参加のきっかけであったり、この空間で初めて出会う「普段接しない人」と話せたりすることも参加のきっかけであるようだ。また、初めて参加した方には、「食事」と「コミュニケーション」により「家族と話しているような雰囲気になった」と感じていただくことが出来ているようだった。どの世代でも参加でき、同じ空間で同じ食事を共有することは、特定の対象者を相手に行うボランティア活動より、地域に根付いた活動と言えるのではないだろうか。だからこそ、DoNabenet in あいちが作り出す空間は誰にとっても居心地のいい場所になり得る可能性をもち、いざという時に助け合える仲間に出会える魅力を持っていると考える。

表8：参加の理由

<b>Gさん</b> 単純に食べるのが好きで、料理がおいしかったからです。幼稚園の頃はママ友がいましたが、子どもが小学校にあがったことで子どもだけで物事が完結するようになったため、母親同士の交流をする場が減ったと感じています。また、1日のうち、夫以外の大人と会話をしない日もあります。ここに来て喋ることで自分自身の気晴らしになるので、参加したいと思いました。
<b>Hさん</b> 学生と触れ合えたり、普段接しない人たちと接したりして、自分と全然違う考え方をすると話すのが新鮮で、発見があるからです。
<b>Iさん</b> 料理を家族以外の方に振る舞うのがもともと好きで、第3回に参加してみて大学生のおぼつかない料理風景や料理のボリュームを見て、同じ500円支払うなら品を増やしたら楽しみが増す、でも大学生に作業をふるのは嫌いということで料理を勝手に段取りして達成感を趣味から得ています。3人のじっとしていない子どもを見てもらえて泣けるほど嬉しいです。
<b>Jさん</b> 退職した後、サロン活動を始めたり、Bee Bee Tree Nightなどに参加したりしたことで人と出会うことが増え、知り合いが増えていった経験から人と繋がること大事だと感じました。特に学生や若い人と話すことは、この会でしかなく、学生も社会人とかかわる機会は少ないだろうと考えています。学生は今起きている社会問題を知らないけど私はニュースとかを見ていたため、この会を通して学生に社会の実態を伝えていけるのもいいと思います。
<b>Kさん</b> (再び参加したいと思えた部分) 単純に食事をしてコミュニケーションをとるところが良かったです。また、長久手という所にそこそこ縁があるからです。
<b>Lさん</b> (再び参加したいと思えた部分) 皆さんの笑顔がとてもいいです。それだけでも元気をいただけます。また、鍋を囲むことで家族と話しているような雰囲気になり、自然と会話が弾みました。メンバーの中でも、出身地が違ってお聞きしたので、今度はその土地の料理を出してもらえると嬉しいです。



表9：参加して感じること

<p><b>Gさん</b>                  学生さんたちが地域のために活動している姿を見て、毎回感心しています。私自身、このようなボランティア活動の経験があまりなく、今になって後悔していることもあり、学生さんがどんな経緯で団体に入っているか気になります。学生のうちに、視野を広げれば必ず役に立つと思います。皆さん子どものあつかいが上手なので、子ども達も毎回楽しそうです。500円の会費だけで大丈夫なのか心配ですが、毎回お腹いっぱい食べられるので、それも嬉しいです。</p>
<p><b>Hさん</b>                  会の雰囲気については、あたたかいところがとてもいいと思います。誰でも受け入れる懐の深さも、いいなと感じます。また、防災訓練とかをしていると聞き、ただこの会だけのつながりで留めるのではなく、活動を広げていっているのがすごいと思います。自分が何かを作るとなるとそこに集中してしまうけど、食べながらしゃべりながらということができることが魅力だと思います。ただ、学生の人数よりも、参加する住民の人数の方が少ないことが気になります。周知活動については広報に無料で載せてもらえるページがあるので、食事会の情報を載せてもらうのはどうでしょうか。また、小学生くらいの子がいる親としては、親の目が見えないところで子どもが知らない人にお世話になることは申し訳ない気持ちになると聞いたことがあるので難しいところです。</p>
<p><b>Iさん</b>                  子どもが3人いると出かけるのが億劫になるけど、自分は料理をしながら子どもを大学生に見てもらえる環境があり、楽しく皆さんとお食事が出来るのでとてもいいです。DoNabenet in あいちに対して補助金があると聞いていますが、中学生以上500円の参加費で、材料が残っても次の回に全て使えないので、ロス面を考えると3か月に1回のペースでこの先も続いていくか心配になります。また、イベントなのできれいな格好、髪型でみえるメンバーの方もいることでしょうか。SNSでも料理風景を投稿していますが、エプロン、バンダナで身だしなみは整えるべきだと思います。大学生の集まりだから、と云われては、この先もつたいないの。料理中くらい、派手ピアスもどうかと感じます。また、地区ごとに食事会が出来たり、児童館とかにチラシおかせてもらったりして周知活動を行ったり、子ども食堂とかに行き、雰囲気をつかむことで食事会のイメージをもっと膨らませたりしてもいいと思います。</p>
<p><b>Jさん</b>                  人を集めて何かをするというのは中々難しいですね。私も地域でサロン活動を始めて、内容作りに苦労しています。お食事会を開くことは自然と時間が流れていくのでいいと思いますが、「リピーター」を増やすような企画を工夫してください。リピーターを増やすことは、その人が持つつながりにより、DoNabenet in あいちの魅力を広めていくことにもつながると思います。出席者がもっと話をし、知り合えるような場となるといいですね。</p>
<p><b>Kさん</b>                  若い人たちの純粋さがいいなあと思います。少しだけでも仲間に入れてもらえることが幸せです。</p>
<p><b>Lさん</b>                  「若さ」をととても感じます。その勢力が伝わって、ご年配の方も若々しくなっているように思えます。メンバーの方々が、「次はどのようにもてなそう」とか、色々考えてくれているのだと感じました。食を通して人と人を繋ぐ活動は、皆さんにととてもマッチしているのではないのでしょうか。</p>

参加して感じること（表9）としては、「毎回感心している」、「誰でも受け入れる懐の深さが良い」、「子どもを大学生に見てもらえるから嬉しい」といった意見を聞くことが出来た。また、大学生の「若さ」に魅力を感じている方もいた。それに加え、「500円の会費で大丈夫なのか」、「広報にお食事会の情報を載せてもらうのはどうか」、「児童館にチラシを置かせてもらうのはどうか」、「リピーターを増やすような企画を工夫する」といった運営に対する疑問や提案も聞くことが出来た。初期のころから来ていただいている方は、大学生の活動を応援したい気持ちがあるのかもしれない。また、身だしなみについて整えた方がいいという意見もあったが、大学生だけで楽しむ活動ではないため、調理中のリスクマネジメントも考え、留意すべき点であるだろう。

4. 課題

最後に、今後の課題を把握するために、2017年8月から9月にかけて、学生メンバー5名にインタビューを行った。結果は以下のとおりである（表10）。

メンバーへの聞き取りから大きく2つの課題が明らかになった。

1つ目は「地域の繋がりとは？」という疑問があることである。第2節で述べたようにDoNabenet in あいちの中での地域の繋がりとは「何か災害が起こった時に助け合えるよう

な関係、また災害が起こらなくても、住民同士が気軽に挨拶や話ができるような関係」を想定している。しかし実際に地域で活動していると、繋がりがどんなものなのか見失ってしまう時がある。団体として方向性をしっかり持って活動していく必要がある。

2つ目は参加者の固定化である。団体が発足して約4年半、本格的に食事会を開催し始めて約3年半経ち、これまで多くの地域住民に参加していただいた。しかし、参加者の半数以上が常連、何度も足を運んでくれる方である。団体の目指す「地域の繋がり」をつくるためには、さらに多くの地域住民を巻き込んでいくことも考えなければならない。そのために、現在行っている周知活動のみならず、実際に学生が地域に出ていき、広報していく必要があると考える。ただし、実際常連ばかりの会を続けていくことが無意味というわけではないだろう。学生メンバーや地域住民同士が、食事会で何度も顔を合わせることによって繋がりが強化され、すでに町中で会ったときに挨拶をする関係になれているし、困ったときに助け合えるような関係になる可能性は十分にある。「地域の繋がり」は、はっきりとした効果を目で確認することはできない。しかし、地道な活動が効果をもたらすことはあるのではないか。大事なことはこの活動を続けていくことであると考えている。

では、今後、大学生ボランティアが地域で浸透し、活躍の幅を広げていくためには何が必要なのだろうか。これか

表 10：今後の課題

- ・地域の繋がりとはいは？をもっと考える必要がある。
- ・どなべの活動が住民同士のつながりづくりのきっかけになっているのか？
- ・繋がりはそんなに広がらない。
- ・参加者が固定化している。新しい人に来てほしい。
- ・たまに目的を見失う。もっと反省会を活かすべき。
- ・学校や学科が様々だともっと良い。タテヨコの繋がりができる。いろいろな視点で見ることができる。
- ・関わるができるボランティアの幅も広がる→繋がりが広がる。
- ・情報共有が大事。出席など。
- ・代表として、メンバーがもっとミーティングや食事会に参加するには情報共有。
- ・ミーティングは全員集まらない、議事録を見るだけではわからないことも。
- ・メンバーの意見はそれぞれでも、団体として同じ方向を見ていたい。
- ・学生は卒業していくから、想いの引き継ぎが大事（現状＆今後のための引き継ぎ）。
- ・仕事が多い→役割分担が必要（運営のため＆メンバーの居場所）。

らの地域における大学生の可能性を考えるため、現在長久手市で行われている大学連携について考えてみたい。

長久手市と市内4大学（愛知県立芸術大学、愛知医科大学、愛知淑徳大学、愛知県立大学）は、まちづくりにおいて大学が有する知的資源や特色を生かし、相互の発展や充実に向けて組織的な連携を深めるため、4大学の学生の交流と意見交換を行う交流会を定期的に開催している（小島・石井・川原・笹山・松宮、2018）<sup>8</sup>。

2017年度第1回目の交流会では、大学生がボランティアをすることで起こり得る【地域にとってのハッピー】と【学生にとってのハッピー】は何かを考えるグループワークを行った。このグループワークでは、学生がボランティアをすることで地域だけでなく、学生自身にも良い影響を与えることを前提として話し合っていた。地域と大学生ボランティアの在り方を考える際には、ボランティアが「人のためにやる活動」といった概念の中だけにあるものではないことを理解しておくことが必要となるのだろう。DoNabenet in あいちの大学生ボランティアへのインタビューでも、参加動機として、「他者を助けるため」、「相手が喜ぶことをしたため」といった、利他的な動機を明確にあげる人はいなかった。「継続しやすい活動場所であった」、「興味をそそる活動内容だった」、「メンバーの雰囲気が良かった」など、自身の興味・関心にあったものであること、そして楽しめる雰囲気がその場にあることが参加動機として挙げられた。しかし、自身の興味・関心から活動を始めた人は「つながり」や「地域交流」といったキーワードに惹かれており、地域のために、困っている誰かのために、という利他的な動機が少なからず含まれていることも忘れてはいけない。

交流会のグループワークにおいて、【地域にとってのハッピー】に「活気が出る」、「仲間が増える」、「新しく生まれる（魅力、今まで知らなかった人や場所の認知、視点）」、「子どもが憧れる存在となる」といった意見が出た。【学生にとってのハッピー】には、「大人とのつながりができる」、「学生同士で仲間が増える」、「人生観を見つめ直せる」、「コミュニケーション能力がつく」、「経験値を高められる」といった意見が出た。DoNabenet in あいちの大学生ボランティアへ

のインタビューの中にも、グループワークで出た意見と被るような【学生にとってのハッピー】を実感している声があったため、グループワークでの意見が単なる学生の想定で語られるものではないことを認識しておきたい。そこで、インタビューで挙げられた【学生にとってのハッピー】について論じていく。

活動を続けていける原動力として、「活動を通して地域の方とつながりをつくっていけることに楽しさを感じ、自分の成長を感じられるから」や、「自分の役割を感じられるから」といった、人との関わり合いの中で生まれる充実感が継続していける原動力として挙げられた。用意された空間で特定の人と関わり合うつながりではなく、自分たちが地域に出向き、周知活動をしてようやく出会えた人たちとのつながりは、より貴重なものであり、もっと多くの人と出会いたい、という想いを掻き立てるのかもしれない。しかし、ここで一番多かったのは「メンバーと関わるのが楽しいから」という意見であった。1人1人個性があり、先輩後輩関係なく話せる空間や、団体として共通の目的を持っている仲間との関わり合いは、メンバー同士刺激し合っているようだ。「仲間をつくるため」といった参加動機はあげられなかったが、「雰囲気が良かったから」という自分の居心地の良さが参加動機となり、活動をしていく中でのメンバーとの関わり合いが継続性につながるということが分かった。さらに、この活動の中で得たものは、「人（大人）と話すスキル」、「団体として活動する経験」、「地域に対する考え」、「行動力」、「顔見知りの存在」などが挙げられた。参加動機は、メンバーの雰囲気や活動への興味・関心が挙げられていたが、得たものとしては知識やスキルといった、「自己の成長」が多数挙げられた。

このように、地域において大学生がボランティアを行う時には地域の方との関わり、メンバーとの関わりによる「楽しさ」が活動の原動力となり、それが同時に新たな学びにもつながっていることが分かった。これこそ、活動を通じた【学生にとってのハッピー】なのだろう。大学生がボランティアをする際には、【学生にとってのハッピー】も常に視野に入れながら活動をすることで、継続性や創造性が培

8 <http://www.city.nagakute.lg.jp/tatsuse/daigakurenkei/vision4u.html>、2018年12月31日閲覧。

われていくことも忘れてはいけないだろう。

一方、2017年度第3回目に行われたグループワークでは、大学生ボランティアが地域で活動していく際の課題が挙げられた。DoNabenet in あいちのインタビュー調査で明らかになった課題としては、「活動拠点や資金面に関する支援」、「他団体に関する情報提供」、「ボランティアのコーディネーター側が魅力や必要性を認識すること」、「周知活動に関する支援」などがあつた。中でも「活動拠点や資金面に関する支援」が最も多く挙げられた。この点に関して長久手市では、「ながくて地域スマイルポイント手帳」というものがあり、地域の活動に参加することでポイントが貯まり、10ポイント貯めるごとに交換品に換えられる仕組みがある。大学生ボランティアが地域で活動しやすくするためには「市と社協がやっているスマイルポイントを貯めたり、学生と大学が繋がって、資金援助をしてもらおう」という指摘もあつた。

しかし、交流会のグループワークであげられた課題では、「情報の共有」が最も多かつた。1つ1つの団体が活動を継続していくための支援のみならず、各大学、あるいは4大学の連携を考えたとき、どのような活動が行われ、何を目的としているのか、どこを拠点とし、誰と関わり合っているのか、といった開かれた情報があることでより効率的なボランティア活動が出来ることを大学生ボランティアは期待しているのかもしれない。そして、情報の共有をしていくためには各大学のボランティア情報、4大学の学生ボランティアが集まりやすい場所の確保が必要となってくる。長久手市には、「長久手市文化の家」、「まちづくりセンター」、「共生ステーション」といった公共の場があるが、それぞれどのような利用方法で使用できるのかを学生が把握できるようにしておくことも必要だろう。

また、大学生という立場にいるからこそその課題もある。インタビュー調査で、参加者からは「身だしなみを整えた方がいい」との意見があり、自分たちがやりたいことを全うする部活動などとは違い、活動に伴うリスクマネジメントをすることや、地域のニーズと活動内容のマッチングも同時に考えていかなければいけないのがボランティアであると痛感させられた。学生からは「大学生が地域にどこまで介入できるかわからない」といった意見があつた。このことについて社協のCSWは、「他の団体とのマッチングや、活動の圏域設定、活動場所、活動するためのノウハウを伝えることは可能です。地域に出ている職員だからこそ、圏域設定の相談にのれると思うし、学生が動けるような位置づけ・枠組みを作っていくこと（事業やプログラムを作る）で学生が動きやすくする手助けは出来ると思います」と話していた。学生の考える範囲で行動していくのではなく、社協や行政といった専門機関を介して地域と繋がっていくことも必要であるのだろう。学生が活動しやすくなるような位置づけ・枠組みを専門機関が作り上げるうえで、学生の緩やかさや機動力が十分に発揮できるような環境が整えられることが望ましいと考える。実際に社協のCSWは、長久手市西小校区の地区社協において、「子育て不安軽減部

会」の枠組みの中で大学生と協働し、子育て応援冊子『あさがお』を作成したりしている。学生が興味のあることと、地域で起こりうる課題の予防をかけ合わせ、学生と地域の媒体となっている（加藤，2018）。

さらに、交流会のグループワークでは、学生が「ボランティアの誘いを断り切れず、活動に参加してしまう」こともあげられた。一見すると、大学生の活気を求める地域と、地域の活動に興味のある大学生とでうまくマッチングが出来ているようにも思えるが、過度な誘いや助成金の払い過ぎが、大学生にとってはボランティア活動をしなればいけないという義務感を生みだし、かえって自発性を打ち消してしまうことも危惧しなければならないようだ。適切な分配が行われたうえで学生の意志が尊重されることにより、他者との自由な出会いが可能となることを念頭に置いておく必要がある。

また、ボランティアをしていると「偉いね」とか、「すごいね」といった言葉をかけられることがあるが、決して特別な人だけがやっているわけではない。他の大学生が遊ぶためにお金を稼ぐのと同じように、目的をもって活動をしていることには変わらないのになぜ一歩引いてみられるのだろうか。大学生ボランティアの中でも、「『ボランティア』という言葉が学生に浸透していない」という意見が出ていた。もちろん、ボランティアを始めて続けていくのはそれなりの意欲と積極性が必要だと思うが、「ボランティア」がもう少し身近に捉えられてもいいのではないだろうか。1つの事業・活動に関わることで自分なりの楽しさを見出し、新しい発見をもたらすボランティア活動は、大学生という立場にいるうちに経験しておくことで、全てが自分の糧になると考える。大学生が活動しているエネルギーと同じエネルギー量で地域の方が応援して下さること、大学生だからこそ誰に対しても変幻自在な存在になり得ること、その存在が地域にとってセーフティネットとなること、経験を通した様々な学びや気づきがあることをこれからも広めていきたい。大学連携における交流会でのグループワークや、調査からも、「自身の興味・関心にあつたものであること、そして楽しめる雰囲気があること」が参加動機として挙げられたが、60代、70代の一般市民より人生経験の浅い大学生の方が興味・関心の幅が広いと考えると、参加への動機付けや意識の喚起を行うことは大学生ボランティアを拡大するうえでより有効的なのではないだろうか。

このように、大学生が地域で活動をしていく基盤づくりとともに、大学生ボランティアの存在を地域に浸透させていくこと、そして、ボランティア活動を大学生に浸透させていくことが地域にとっても大学生にとっても有意義になるのではないだろうか。ボランティアに興味のない人をどう惹き付けるかよりも、まずは興味を持った人がいかに活動を続けられるか、その環境整備が必要となるだろう。子ども、高齢者、子育て世代、障害者など、相手によって変幻自在になる大学生という存在が認知され、市町村内に大学がない地域でも、その住民である大学生が集い、活動が出来る場があることが理想的だと考える。繰り返しにな

るが、ボランティアとは、「自発性」や「公共性」、「無償性」の理念や「人のための奉仕」といった概念だけで語れるものではなく、自身にとっても重要な意味を持ち、ボランティアに関わる全ての人々が成長すると考えられる。地域でボランティアをしていると、活動の評価や結果が目に見えない分、自分たちが行っていることが本当に正しいことなのか、効果があるものなのか、戸惑うこともある。ただその根底に、「他者のためにする活動」に加え、「自分の成長のため」「大学生にしかできない緩やかなネットワークをつくる」といった意識や目標さえあれば、自信をもって自分なりの活動を続けていくことが出来るだろう。そのため、その意欲を持った学生ボランティアが地域で活躍できるよう、学校をはじめとする組織が学生の要望に耳を傾けてほしい。ただボランティアセンターを設置するだけではなく、長久手市であれば細かい施設の情報や、公式でなくとも、各学校内、4大学で行われているボランティア情報をまとめることも今後必要になると考える。その第一歩として現在、長久手市の大学連携が進められているが、決して意識の高い人たちだけがその連携の輪の中にいるのではなく、ここで出来た計画をもとに、誰もが参加できる地域のボランティア活動が推進されることを期待する。その際、先ほど述べたような大学生の立場だからこそ活動が行き詰まることの無いよう、大学や行政、社協などはあくまで大学生が活動する枠組みを作る程度に関与し、学生の自主性が尊重されるよう留意することが望ましい。インタビューの中でも意見として挙がっていたが、ボランティアをコーディネートする人も、なぜ学生ボランティアに参加してもらいたいのか、ボランティアに参加することで学生が得るもの、成長できることを把握し、地域の活動が単発で不満の残るものにならないよう留意する必要があるだろう。そして、大学生と大学、大学生と社協、大学生と地域がそれぞれつながりを持つことで、大学生ボランティアの可能性は拡大し続けると考える。

<以下(下)>

付記 本稿は、2017年度長久手市大学連携基本計画策定ワーキンググループ受託研究、およびJSPS科研16K04084(研究代表：松宮朝)による研究成果の一部である。

## 参考文献

- 愛知県・愛知県立大学・(公財)愛知縣市町村振興協会編, 2014, 『【平成25年度】あいち地域づくり連携大学事業報告書』。
- 愛知県立大学東日本大震災復興支援委員会編, 2013, 『平成25年度愛知県立大学ボランティア活動報告書』。
- 荒井俊行・野嶋栄一郎, 2017, 「大学生のボランティア活動への参加成果志向が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響」『日本教育工学会論文誌』41(1):97-108。
- 加藤昭宏, 2018, 「コミュニティソーシャルワーカーによる子どもの支援の展開可能性について」『人間発達学研究』9:43-55。
- 小島祥美・石井晴雄・川原千香子・笹山実希・松宮朝,

- 2018, 「地域社会への貢献をめざした大学間連携の実践」『愛知淑徳大学アクティブラーニング』11:33-46。
- 津止正敏・斎藤真緒・桜井政成, 2009, 『ボランティアの臨床社会学』クリエイツかもがわ。
- 松宮朝, 2011, 「大学における地域連携・地域貢献と社会調査をめぐるノート」『人間発達学研究』2:43-50。
- 松宮朝, 2014, 「『地域参加』の施策化をめぐる」『社会福祉研究』16:15-28。
- 松宮朝・石井晴雄・川原千香子・小島祥美・中根多恵・笹山実希, 2018, 「大学連携におけるボランティア活動推進をめぐる課題」『共生の文化研究』12:26-47。

## 謝辞

活動でお世話になってなりましたすべてのみなさま、また、調査で貴重なお話をうかがわせていただいたみなさまに、厚く感謝申し上げます。